

十字架のイエス・ベネディクト修道会

# 修道院便り

2021 年クリスマス / 2022 年新年



空の鳥を良く見なさい。種も蒔かず刈入れもせず倉に納めもしない。だが  
天の父は鳥を養ってくださる。(マタイ 6 :26)

白子の田園風景



# 主のご降誕と新年の お喜びを申し上げます。



2021 年も主のご降誕を迎え、新しい年を迎えよう  
としています。今年も昨年に引き続きコロナ禍で世  
界は翻弄されました。

教会も度々閉鎖され、多くの活動が制限され、信徒  
の皆さんは一同に集まって礼拝や交流が出来ません  
でした。

このような状況にあっても、多くの方々が本修道院共同体のためにお心づかいを  
示してくださり、私たちは助けられてきました。皆様からの物心両面の温かい御援  
助をいただき、本当にありがとうございました。

世界でも日本でも多くの試練がありますが、私たちは社会の方々と連帯し、平和  
のために祈り続けたいと思います。  
来る年もどうぞよろしくお願いいたします。

希望のうちに心からの感謝を込めて

平和の元后修道院 姉妹一同

## 今年もまた先輩シスターに感謝をこめて！

Sr. veronica 高橋和子



去年は私の修道生活初期からお世話になったシスター服部の帰天に当たって彼女のことを書きました。今年、また2月に、先輩シスター、Sr. M. アルベリック（樋口碩子）が天に召されましたが、このシスターにも大変お世話になり、支えていただきました。

Sr. M. アルベリックもフランスの本部修道院に入ったシスターで、日本に修道院が創立された時帰国してそのメンバーになりました。非常に語学に優れ、また、大自然を愛していたシスターでした。若いシスターたちにフランス語を教え、また、庭の仕事も一緒にしながら教えていました。

岐阜県が多治見市から今の白子町に移ってきた時には修道院の建物があるだけで何もない殺風景な場所でした。それで彼女は庭師になるための勉強を通信教育講座で学び、庭に種々の樹々と様々な草花を植え美しい庭にしました！

今ではそれらが大きくなり色々な花が咲き、実を实らせています。







Sr 赤井ゆきこ



ENI SPONSA CHRISTI, ACCIPE CORONAM QUAM TIBI DOMINUS  
PREPARAVIT IN AETERNUM.

「来たれ、キリストの花嫁よ、主がとこしえにあなたに備えた冠を受けなさい」

この歌はグレゴリアンのレッスンの時に習った歌です。

今年の初めに聖母被昇天の聖マリアのイコンを見ながら聖書の中の Corona の意味を、聖ペトロ・パウロ宣教会士であるジュリアーノさんの聖書講話の時に学びました。時あたかも世界中にコロナが感染拡大のさなか、大きな不安と恐れが人々の心にある時・・・

もちろん、「Corona」という言葉は同じでも聖書のメッセージは同じではありません。

ヨーロッパの教会や修道院にはたくさんの聖母被昇天のイコンがあり、その一部をカラー印刷したものを通して見ることができました。聖母がキリストから冠を受けたように教会（キリストの花嫁であるキリスト信者となった私たち）の未来の姿であること。イコンの中の聖母はキリストと同じように光輝いています。私たちもキリストによって神化にあずかると。

同じく8月にルヴリヨフの三位一体のイコンから「神は天地創造の前からキリストにおいて私たちを愛された」（エフェソ1:4）。描かれたテーブルの真ん中にある屠られた子羊を囲んで、私たちもいつかそのテーブルの宴に招かれていること。

エウカリスティア（感謝の祭儀）のパンとぶどう酒の捧げもの、聖体を拝領し神と一つとなる恩恵にあずかることを聖書のテキストを通して考察し意味を学びました。神の人間に対する愛がどれほどのものであるか。その深さと広さと大きさは私たちの心と思いをはるかに越えています。人間が聖なるものとなるために神は御自身が何者であることを示すために、具体的に人間となって行動し、見えるかたちで触

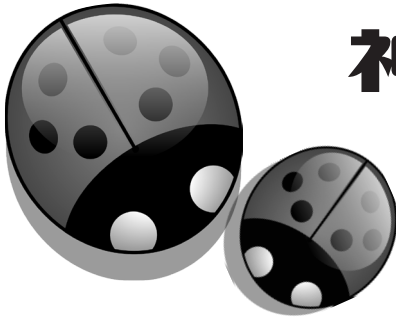
れさせて教え示した。

—昨年よりコロナ禍が続き、社会も人々の生活も大きく変化し、不安や困難の中で私たちの隠世修道院は千葉の田舎の小さな町で都会の人口密度の高い地域と違って毎日ミサと聖務にあずかり、主に賛美と感謝を捧げてこられたことは有難いことでした。

今、気候変動から来る災害、コロナ禍の闇の中にあって聖書の伝えるメッセージを希望を持って聞き、生きる力と喜びを新たにしています。



フラ・アンジェリコ作（サン・マルコ修道院、フィレンツェ 1441-43 年）



# 神の恵みのわざ

Sr. 金井 玉枝

\*以下は Sr. 玉枝とのインタビューを編集したものです。

修道会に入会する前、私は明治学院大学の文学部で英文学を学んでいましたが、卒業後すぐに修道生活に入ったのではなく、一年間、四谷の英会話学校に通っていました。朝、四谷の聖イグナチオ教会で御ミサにあずかって、それから学校に通う毎日でした。その当時、上野毛の男子カルメル会で霊的指導を受けながら、召命の下地を神様は準備してくださったのだと思います。本会の修道院は当時は岐阜県多治見市にあり、入会前、聖週間の三日間の黙想、夏の一ヶ月の黙想を一度過ごしました。最初に多治見に行った時は、代母であった友人と一緒に東京から東海道線を下って多治見まで同伴してくれました。

修道院入会の許可をいただいて、喜びの内に入会の準備を整え、その時は妹が東京駅まで見送りに来てくれました。1月4日の寒い日でした。

私は修道院といえば上野毛の男子カルメル会しか知りませんでしたので、多治見で生活をはじめて、ずいぶんカルメル会とは違うなあ、と思いました。カルメル会の修道院はとても静かで音がしないんですが、こちらはやけにドタン・バタンと雑音がするんですね。姉妹の皆さん、杖を使っている足の不自由な方や車椅子を使っておられる姉妹もおられ、いろんな音がするんです。にぎやかな修道院だなあ、と思いました。

でも、姉妹の皆さんがとても優しく親切で、すごいなあ、と。一番感銘を受けたのは何でもやらせてくれる、ということでした。どんなに障害を持っていても、ちゃんと一人一人を尊重して手を出さないんです。だから、私にとってはとてもありがたいでしたね。普通だったらすぐに手をだすでしょ。ご不自由でしょうからとか、

お手伝いしましょう、お困りでしょうから、とか言って。でも修道院では本人がやるのを尊重しているんです。私はそこが一番良かったと思うんです。その姉妹を尊敬、尊重してるんですね。その姉妹ができる速度ややり方を尊重してるんです。もちろん、共同体にとって迷惑になることはちゃんと伝えてくれて、してはいけないことは教えてくれました。そして共同体は明るくてね、いつも皆さんが優しいんですねえ。ああ、いい共同体だなと思いました。

他で障がい者を受け入れる修道会はず、ありませんよね。私の代母さんは深大寺の女子カルメル会修道院に入会し、今は山口で院長を長年つとめています。でもカルメル会は視力障害者や身体障害者は受け入れていませんよね。私は修道生活をしたかったので、本会に受け入れてもらってとても幸せです。その修道生活が今はもう 50 年近くになります。多治見に入会した当時のういういしさはもうなくなっていますが、主イエス・キリストへの奉獻の心はまったく変わっていません。

私だけでなく、私の家族も安心しています。父は亡くなるまえに、お前はいい道を選んだなあ、と言ってくれました。この恵みの道を最後まで歩みつづけて行きたいと思っています。



# 私をたとえると○○である

Sr. 大場幸子<sup>さちこ</sup>

毎週水曜、夕食の片づけをした後、楽しいひとときを過ごします。11人のシスターが順番にテーマを提供して、そのテーマに沿って1人1人わかちあうのです。実にシスター達はためらうことなく自分を表現します。時間の制限がありますから充分に言えませんが、2回3回となることがあります。最近は“旅の思い出”、“海の思い出”、大阪カトリック時報のQRコードから“わが命つきるとも”の映像を見たり、“心に残るいただいたことば”等をわかちあいました。その中で“私をたとえると○○である”というテーマは大変おもしろかったので、今年の修道院便りの記事にしました。紙面の都合で4人のシスターのわかちあいを紹介します。

シスターY。私をたとえると“路傍の石”である。ほとんど注目を集めることがない。しかし、心の傷ついた人がふと、たまたま、ごくたまに私に目を留めるときがあると、どういうわけか平和と癒しの恵みを受ける。

シスターF。私をたとえると“竹”である。御父に向かってどこまでもまっすぐに伸びる竹。「地震の時には竹林に逃げなさい。」と言われるくらい。竹はどこを切っても同じ。そして切り口がスパッと美しい。雪が降っても風が吹いても竹はしなやか。

シスターM。私はカタバミのようなものである。どんな厳しい生育環境であっても、また絶え間ない草取り攻撃にあってもめげずにどんどん根を張り、花を咲かせるほど。しかし、ひょっとして万が一、このコロナ禍で疲れ切ってトボトボと下を向いて歩いている人にエネルギーと希望を与えるきっかけになれるかもしれない。

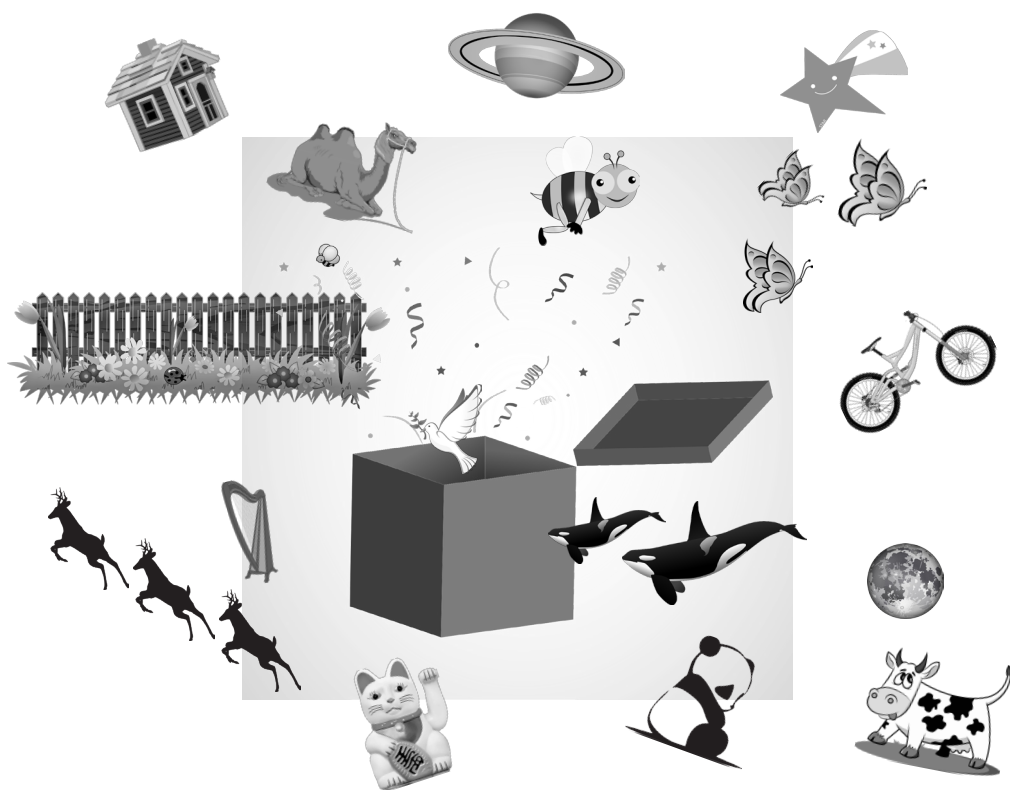
シスターO。私をたとえると“牡丹の花”である。大らかに咲き、まわりを明るく平和な雰囲気にする。花ことば通り、“風格”がある。花弁は薄く、その繊細さを



私は持ちあわせていないけど。＜中国の名花。中唐以降は花王とか、花神とたたえられる。＞（『花おりおり』より、湯浅浩史著、朝日新聞社）神様がお造りになった私と牡丹の花はなんと美しいのでしょうか！

たとえの内容として、動植物、天体、建造物、仏像等、このテーマでご家庭、職場、施設、共同体でされたらきっと楽しく、あーなるほどと合点がいくと思います。

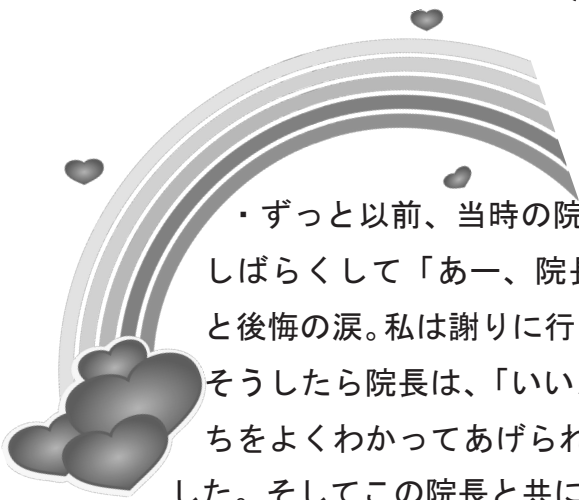
神様が創造された1人1人、たとえの根拠と提供できるタレントとか資質をあらわすと、お互いに豊かになって神様を賛美する歌が満ちることでしょう。



# あのひとこと

あの時、院長からいただいたひとこと、そして・・・

Sr 船田由美



・ずっと以前、当時の院長に腹を立てました。怒りは静まりません。しばらくして「あー、院長に対してなんと失礼な事をしたのだろう」と後悔の涙。私は謝りに行きました。「先程は本当に失礼を致しました。」そうしたら院長は、「いいえ、私の方こそごめんなさい。あなたの気持ちをよくわかってあげられなくて、ごめんなさい。」私は驚き感動しました。そしてこの院長と共に生きられる幸せを実感しました。

・もう一人の別の院長は「由美さん、きれいよ」ととても辛いことがあって院長室でしゃっくりあげて泣き、鼻水も出て、ひどい顔になっていたと思います。その私を見て「由美さん、きれいよ」えー、そんな。ひとしきり泣いて落ち着いてから、辛いことをボツボツ話しました。傷ついた心は癒され、私は新しい命で再び生き始めることが出来ました。忘れられない思い出。

・そして、入会前から私に命を与え導いて下さっているひとは、

本会会員が毎日午後3時に唱える祈りの中の「イエスは死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従う者となられた。」です。イエスの歩まれたひとすじの道を本会で歩みたいと入会を希望し叶えられました。

入会したその年の1983年に開かれた総会の指針を読み、心に強く焼きついて離れない「三つのはい」。

「おん父はおん子のうちに、私達に「はい」と仰せられます。

おん子はおん父に「はい」と仰せられます。

私達は最愛のおん子を眺めます。

おん子のうちに、聖霊によって私達は「はい」とおん父に申し上げます。」

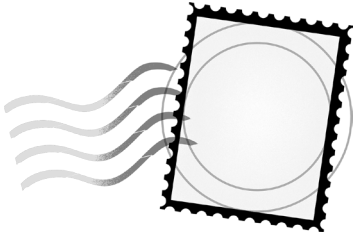
終生誓願宣立前に標語を考えていた時、「父と主イエスは私に日々、「はい」を生きてほしいと願っている。そして、聖霊は私がその願いを生きられるように助けて下さる。」と思いました。標語「はい、父よ」は、父と主イエスと聖霊からいただいたと信じています。

こうして、私は日々、「はい、父よ」をお捧げしたいと望みながら、でこぼこのひとすじの小道を泣いたり、怒ったり、喜んだりしながら歩ませていただいています。



# 受刑者との文通

Sr. 鈴木喜代



私達は、被拘禁者更生支援ネットワーク“麦の会”の紹介で、受刑者との文通を始めて13年になる。

現在、5人の姉妹が関わり、私もその中の1人です。

私が最初に関わりを持った人は、中部日本で起こった少年グループの攻防事件（当時19歳）で、服役中の30代の青年だった。事件の根底にあったのは、家庭の貧困、親の離婚、路上に投げ出された彼の行きつく所は不良グループの仲間になることだった。そして起こした事件、少年犯罪でもあったので大きな社会問題となったのだった。

彼は服役中に一冊の本と出会った。“聖書”であった。むさぼるように読んだと手紙の中にあった。

そこで大きな改心が起こり、180度人生行路が変化したのである。被害者のための謝罪、自分のしたことが後に続かないことへの祈りなど、いつも便せん7枚（規定されている）にびっしり書き記されてあった。彼とは2年余り文通したが、東日本大震災があった2011年3月、死刑判決を受けたので、外部文通は遮断され、特定の人だけが連絡を取り合っている。その中で“支える会”というのが出来、そこから毎年末、動向を知らせてくれている。

文通者とのやりとりについては、私たちは大体聴くことに徹しているので、自分の感情や問いかけをあまりしない。また、内容を口外することはしない。問いと共に共感したことについて返事をしてゆくのです。

ある人とは4年位、文通した。出所する時に自分は足に障害があるので、働き口があるかと心配していたが、今どうしているか・・・身元引受人が家族なので、元気に再出発しただろう。

又、20代の青年とは何度か文通したが、ある時自分から辞めたいと丁寧な手紙をくれた。もしかしたら裁判のことか、あるいは突発的に何か起こったかは知らない。それはそれでいいのです。事情があったことだから。

さて、ここで一番長く7年余り文通し、いつも7枚びっしり書き話題も豊富で、今起きている社会現象のことなど語ってくれて、私もいろいろ教わった。その彼は、昨年末に10年の刑を終えて出所したはずだが、コロナ禍のことでもあり、連絡がない。しかし身元引受人も決まっているといていたし、家族も待っているの、元気に過ごしていると思うので安心している。この他に短い刑期でもやりとりをした人もいる。

さて、ここで今年に入って突然、見覚えのある名前の手紙が届いた。この人とは、2,3度文通した後、来なくなったが名前は覚えていた。10年余り前のことである。手紙を読んでゆくと配られた修道院便りの中に私の名前があったので、懐かしくなって書いたとあり、「あの時は失礼しました。自分は未熟であったので、カッとなってしまって・・・」と。ああ、そうだった、物品の依頼が来たので、簡単な文通心得とそれは出来ないと返事をしたのだった。何はともあれ、嬉しく思ったのですぐ返事を出した。

このようにいろいろな人との出会いがあるが、刑に服している中で少しでも明るく希望を持って歩んでいけたらと、彼らのことを祈っている私達です。





# 初誓願から 4 分の 1 世紀

Sr マリア洋子（穂積洋子）



2020 年 12 月 5 日土曜日、ここ白子町の平和の元后修道院の聖堂で、私は初誓願から 25 年、銀祝のミサをしていただきました。コロナのため、盛大にすることはできず、マスク着用でした。はじめは残念だと思いましたが、あとから写真を見たら皆がマスクをしている姿が印象的で、これもなかなか珍しいめぐり合わせだから、かえって良かったのかもしれない、と考え直しました。

1995 年 12 月 8 日、無原罪の聖母マリアの祭日に初誓願を立てましたが、その日のことは正直に言えば、ほとんど覚えていません。ただ、立願者のしるしである木の十字架がうれしくて、母に「これが欲しかったのよ！」と言った記憶があります。姉妹たちによれば、母はミサのはじめから終わりまで泣きどおしだったそうです。確かに記念写真の母は、ハンカチを握りしめていました。その母はもう帰天して 21 年たちます。天国で、私の銀祝のミサを見てくれていたことでしょう。

しかし、このお祝いのミサで、私は大失敗をしてしまいました。式の大事な場面、神さまに自分自身をお捧げする *Suscipe* の独唱の最後で、ラテン語の歌詞を忘れてしまったのです！ただでさえ大きな声の私が、思い切り大声で歌い出したところへ、突然の沈黙……。司式してくださっていた野口神父さまの方を見ると、神父さまの目もパニック。けれど、何ということでしょう！マスクをしていらっしやるので、口元が見えず、きっと忘れた単語を教えてくださいに違いないことはわかって、私には見えません。ああ、神さま！

けれど、実際にはこの沈黙はそれほど長い時間ではありませんでした。私自身に

はほとんど永遠に思えましたが、天使がささやいてくれたのか、急に思い出すことができ、なんとか歌い終わることができました。でも全身冷汗。おかげでそのあと何かの動作を間違え、せっかく義妹が送ってくれた素敵な白の布マスク（この日のためにとおいたものです）はひもが解けてしまい、式の最中に結び目を作るのに必死でした。どうして私はいつもこういうふうになってしまうのかしら？せっかくビシッと決めたいのに、たいてい何かのアクシデントが起こるのです。

でもアクシデントと言え、私のこれまでの人生がずっとそうだったようです。けれどもそれで私は不幸になったのでしょうか？アクシデントというとネガティブに聞こえますが、神さまの目から見ると、それは私に対する神さまの恵みの介入の時だったようです。だから私は、相変わらず毎日の生活の中で転んだり滑ったりしながらも、幸福なのだと思います。人それぞれ幸福とすることは違うかも知れませんが、私にとっては、心の満たし、愛されていることそして愛することができることと言えます。

外面的にいろいろなつらいことがありましたし、内的試練もありました。これからもあるでしょう。でも、たとえどうあろうとも、神さまが私の根幹であられること、神さまのみ言葉は必ず実現することを体験させていただいているので、私のこれからの残された人生において、神さまの慈しみをいただき、それを生きることができさえすれば、感謝のうちに歩み続けることができると思います。神さまが誓願 50 周年の金祝をこの地上で祝わせてくださるかわかりませんが、命のある限り、神さまへの賛美と感謝を歌い続けてゆきたいと願っています。

主よ、あなたのみ言葉によって私を受け入れてください。

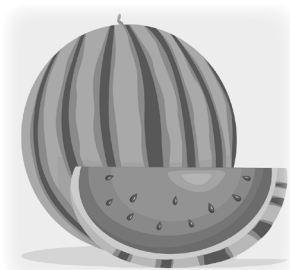
私は生きる。私の望みは揺るがない。 （詩編 119, 116）

*Suscipe me Domine, secundum eloquium tuum et vivan.*

*Et non confundas me ab expectatione mea.*

# 全ての命は、つながっている

Sr. Maria・光恵（佐久間光恵）



9月一日～10月4日まで「全ての命を守る、命の月間と定められた。」この意向のために、一人一人がどのように意識し、実行したでしょう。

修院の小さな畑に立ってみると葉の間からスイカが顔を出している。不順な天候の中7月末、やっと実をつけたスイカ！

大きく成長してくれるのか気がかりでした。今、そこそこ大きくなって「育ててくれて、ありがとう」と黙しつつ、語ってくれているような気がする。私も「育ててくれて、ありがとう。」と黙しつつ、感謝する。

互いの命が響きあう瞬間、全ての命がつながっているのを実感する。神は命であり、愛（真、善、美）であると私は信じている。しかし、その命を誰も見たものはいない。命と愛は、地球上の生命体にやどり輝いているというのに！

21世紀、コロナウイルスが世界中を汚染してしまった。人類にとって大きな試練です。しかし、地球の自然破壊は、長い時間をかけて静かに忍び寄り、根底から殺していく。今、地球が危機に瀕している事は誰でも知っている。寒さに凍えている人に「暖まって行きなさい。満腹に食べなさい。」と言うだけで何にも与えないなら、何になるのか！！私は、無関心になっていないだろうか？飽くことなく、快楽を求めているだろうか？質素を大切にしているだろうか？全ての生命体は与えあい、受けあって生かしあう秩序と循環の深い神秘の中に在る。命の主よ！私にできることは・・・

命の根源である創造主に祈ること。今、ラップの使い方を減らすこと・・・今、地球が喜んでいる。水を、お湯を大切に無駄にしない。今、地球が喜んでいる。下水をできるだけ汚さない。ホラ、地球が喜んでいる。ゴミを減らす。今、地球が喜んでいる。

極小さな事を日々実行するなら地球は喜んでいきます。地球に住む全ての命が喜んでいきます。命の源である天の父が喜んでいきます。“生きよ！ 誰の死をも私は望まない。”と・・・



# 庭の小さな生き物たち



Sr. Maria Faustyna 小林清美

修道院の敷地内には、お花だけでなく、いろいろな生き物が登場し、私達の目を喜ばせてくれたり、驚かせてくれたりします。

数年前、ある日突然、一匹の野良猫が現れ、いつの間にか住みついてしまい、その後死んでしまったのですが、それ以後、また別の猫が現れ、住みついたり、近所の飼い猫が時々、敷地内にいたり、とにかく猫の存在が途切れることはありません。

先日、朝モップを叩くために外に出たら、親指の先ほどの小さな生き物が地面を歩いていました。小さい頃から、猫とうさぎ以外、ほとんどの生き物は苦手だったので、動いているのを見たとき、こわくて近づけませんでした。たまたま植物や動物に詳しい姉妹が近くにいるのを見つけ、尋ねたら「あっ、それモグラの赤ちゃんだよ！」という答えが返ってきました。「えっ？モグラって太陽に当たったら死んでしまうと聞いたことがあるけど？本当にモグラなの？」と思いながら、おそろおそろ近づいてみると、近くにあった台車の下にゆっくり、ゆっくり逃げるようにして移動していきました。それが、本当にモグラの赤ちゃんだったかどうかは不明ですが、もしモグラの赤ちゃんだったら光を避けるという本能が生まれつきあるのかな？と思いながら、こわいもの見たさで少しだけ観察していました。

ほんの数センチ程の小さな生き物が、一生懸命、生きようとしている姿を目にしたとき、神さまの創造の業の大きさ、すばらしさと限りないいつくしみを感じます。存在するものをすべて愛される神さまの愛といつくしみを祈りのうちに証ししていける恵みに感謝しながら奉獻生活を生きていきたいと思います。





## 死の彼方まで

Sr. Maria Igntia 塩澤幸子



最初に、親類のTが私に分かち合ってくれたちょっと嬉しい話をご紹介します。

数年前、Tが仕事を終えて夜、家に帰ると玄関先で迎えに出た5歳の娘のNちゃんがカードを手渡してくれたそうです。そのカードには全文ひらがなの大きな文字でメッセージが書かれていました。「ぱぱへ いつもありがとう もし、ぱぱがさめにたべられてしまったら わたしもたべられてもいいよ。どうしてそうおもうかとゆうと ぱぱがだいすきだから。」と。

これを読んだTの心は喜びに震え、涙で目をウルウルさせながらNちゃんをギュウツと強く抱きしめてあげたそうです。幼いNちゃんにとってサメに食べられてしまうことは、大好きなパパと離ればなれになってしまうこと、それは死を意味することなのではないでしょうか。パパが死んだ後、サメのお腹の中で再会できることを信じるNちゃんのピュアな気持ちに私の心も揺さぶられました。

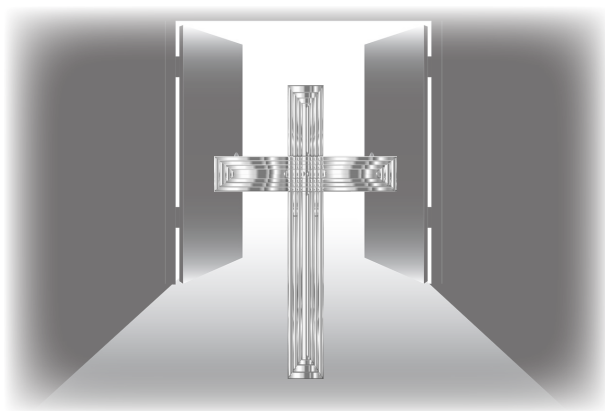
さて、かつて、私は人生を共にした伴侶と死別し、悲嘆に暮れる時期を過ごしました。この喪失体験から、死は決して遠くにあるものではなく、生きる上で避けては通れない現実であり、とても身近なものとして受け止めるようになりました。昔からずっと死＝終わりというイメージを強く感じていた私に、終わりのない永遠のいのち、天国に対する憧れのようなものが強められていきました。

聖書ではキリストを信じる者に対して「永遠のいのち」を明確に約束しています。修道生活に入ってから、毎日、聖書を読んで黙想し、主との交わりを深めていく中



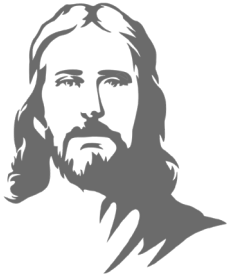
で、それまで何も見えていなかった死の彼方にあるものが薄っすらと見え始めてきたような気がします。日々の生活を通して、自分の弱さや至らなさ、人に対する期待と失望、人間関係からくる苦しみと疲労…確かに目の前の苦しみから早く抜け出たいと思うことがあります。でも、少し立ち止まると、心のただ中にいつもおられ自分を愛し、慰め、支えていてくださる存在＝主イエスに気づかされるのです。イエス・キリストは私を死の彼方ある平和と幸福、癒し、喜びに満ちたところまでエスコートしてくださる救い主です。この方のために自分の生涯をお捧げすることができたらどんなに幸せなことでしょう。

先に行って死の彼方で待っている人々と、そして、その場所で手を広げて迎え入れてくださる方に会える日まで、主イエスが喜ばれることを今あるこの場所で行っていきたいです。





Sr. Francisca (岡島静代)



イエスの復活のあと、弟子たちはイエスの指示に従って、首都のエルサレムから故郷のガリラヤへ帰りました。そこで以前生業としていた漁を始めました。

漁は彼らにとって、ごく当たり前の日常だったのです。イエスの逮捕、十字架刑そして師の復活という彼らの人生にとって、すべてが覆<sup>くつがえ</sup>されるほどの重大な出来事のあと平和な故郷での日々でした。そのガリラヤ湖のほとりにイエスが普通の通りがかりの人のように立っていました。はじめ、それが主イエスとは気が付かなかった弟子たち・・・

今年の夏の日曜日、私は熱い日差しの下、田んぼを歩いていました。(といっても歩行器で) 上記の福音の箇所を思いめぐらしながら歩いていました。とても暑いのですが、白子の夏はいつも風が吹いているので、その風が心地良く、暑さを忘れさせます。稲刈りを待っている田んぼ、白鷺の舞う姿、用水路には鯉やメダカやドジョウなどが泳いでいる、のどかなあぜ道。遠くに農作業している人影が一人二人と見えました。その時です、私の心の深いところから「イエスがおられる！復活のイエスが！」という叫びのような思いが湧き起りました。神々しい姿でもなく、光り輝くイエスでもなく、農作業している人の中に私はイエスを観たのです。

漁をしていた弟子たちがイエスの姿を見た時の驚きが伝わってくるような思いでした。そうなのだ、主イエスと出会うのは毎日の日常の中なのだ、私の心は深い思いに満たされ、そのままあぜ道を歩き続けました。一緒に生活する姉妹たちの中に、すれ違う人の中にイエスを観る。それは、いつでも出来る事ではないかもしれない。それでも、一瞬の体験として心に刻まれました。

イエスとの出会いは平凡な生活の中で起こるのです。ただ、そのためにはあまりにも外的なことに囚われてしまっていたら気が付かないのかも知れません。

周りの小さなことに感動する心、姉妹たちのちょっとした優しさや一生懸命働く姿に感動する心、空、風、花、木々の美しさや移り変わりに感動する心、外部から来られる人々の真摯な姿に感動する心などを通してイエスの姿を見つけることができるでしょう。



# 心と信仰

---

Sr 関雅枝



フランスで生活してかれこれ 30 年、相変わらず言葉は悠長と言えないのだが、実際に生活する場と言うことで身につけることも少なくなかった。何かを理解するうえで生まれてからの経験や知識も手伝ってくれることも多くあったので、今の私の考えはそれらの混ぜこぜであると思っ

てほしい。たとえば今回同じ唯一の神を奉じているイスラム教信者の話を分かち合いたいのだが、私が入会したころ日本で身近な人の中にイスラム教徒の知人はいなかった。その後ニューヨークでの事件、中東での過激派組織の状態を通して、もし私の生活の場が常に日本であったなら、私の考えは今と同じと思えないと感じる。前置きはさておき私は今、日に何回も多くの外国人介護援助者のお世話になって生きている。実に多くの国籍の人、たとえ生まれはフランスでも二世三世の人が生活のためみんなが望まない仕事についている。その一つの職種に介護援助者というものがある。アフリカからの人たち、アメリカ大陸の某国、もと植民地、あるいは今もフランスの県のひとつであるところからの人に加えて、マロッコ、チュニジア、アルジェリアなどからの人々が就職している。私も介護福祉を受けている一人なのでこうしていわゆるアラブ民族の人との知己がおのずと増えていった。キリスト教徒、イスラム教徒と一口に言ってもその信教のほどはそれぞれであるが私は何人かの真のイスラム教信者と親しくなった。お互いにお互いの宗教に深い尊敬を持ちながら共に生きられるのはなんと心温まることであろう。その中の一人はとても気の毒な過去と、家族の病気を背負っての今を生きているのだが、ただただ神の慈愛に望みをかけて生きている。先日ちょっとした給料計算の行き違いがあった時、「入金しないならそれでいいのよ。神様が見てくださるのだから。

本当よ。少し前に娘が歯の治療をしなければならなくてそれが50ユーロ掛かると言われたの。お金ないしどうしようと思案しながら道を歩いていて、ふと下を見たら何かが落ちていてよく見たら50ユーロ札じゃない。誰が落としたのかなーと思って周りを探したのだけど誰もいないの。それで私それを貰っちゃったわ。そして娘の歯の治療代にしたの。本当よ、神様は私にいつもよくしてくれるんだから。」私は彼女が愛おしくて抱きしめてあげたい衝動を覚えた。日本の美談に出てくる結末にすると拾った50ユーロは必要にも拘らず交番に届けましたとなるかもしれないがそこは文化、民族を異にする人の反応、私の神様であるイエスだって私と同様に彼女の行動を愛おしく思ってくださったのではないかと思った。その彼女が言うには神様は彼女にいつもお心を見せてくださるのだそうだ。先日もトマトをひとパック買ったらその中に心（ハート）が入っていたと言って、スマホにおさめた写真を送ってくれた。この記事の冒頭に搭載したものである。また他のひとりに丁度ブルー（私の住んでいる町）から遠くないモンフェルメイの町（そこにはアラヴ人がたくさん住んでいて物騒なところとして有名なのだが）で起きた暴力沙汰についてどう考えるか聞いたところ、あれはマホメットの教えではないと反論されたものである。かれら貧しくも正直に生きているアラヴ人にとって過激派の行動は甚だ迷惑だと言っていた。アラヴ人の職人もアラヴ人と聞くと即過激派と思われてしまうのでたまらないとのことだった。二度目にフランスに永居した時に黒人が多くなったことに驚いたが、アラヴ人には注意が向かなかった。それが今ではこの通りである。まだ分かち合いたいエピソードはいっぱいあるが締切日も過ぎていることだし、この辺で終わりにしようか。

皆様、良いクリスマスと新年をお迎えください。



Sr マリ・アルベリック樋口碩子が帰天しました。



1933 年 10 月 30 日 誕生

1965 年 十字架のイエス・ベネディクト修道会に入会（フランス）

1967 年 10 月 3 日 初誓願宣立

1972 年 11 月 19 日 終生誓願宣立

2017 年 9 月 30 日 金祝（誓願 50 周年記念）

2021 年 2 月 16 日午後 5 時 50 分、白子町の介護施設で肺炎のため 87 歳で帰天。

本会がまだ日本に創立されていなかった 1965 年フランス本部に入会。フランスでの養成を終えて 1972 年に帰国。1975 年より 3 年間院長職を務めたのち、アメリカに派遣され同地で約 10 年間の奉仕後再び帰国。語学力を生かし、英語、フランス語の翻訳で共同体のために奉仕しました。



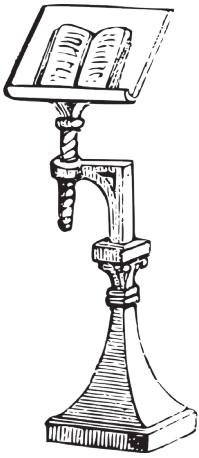
名前のように、頭脳明晰でギリシャ語を米国時代に学び、新約聖書を原文で読むことが出来、後輩たちに聖書を教えてくれました。知識欲旺盛で、帰国後に庭木や果樹の技術を通して学びその仕事に尽力しました。1991 年、裾野共同体のメンバーになるまで白子の庭では彼女のお蔭で果物が毎年豊富に実りました。

2001 年裾野共同体の閉鎖に伴い、再び白子での生活となりました。それから再び白子の庭は生き返り、果樹がよみがえるようになりました。

持ち前の粘り強さで様々な分野で共同体のために尽くしました。ある時、腰を打ってしまいそれから転倒も繰り返し、次第に体力がなくなり身のまわりのことが自身で不可能になりましたので白子町の施設に 2018 年に入所。その施設は小規模で明るく清潔な住居で、職員の方々の手厚い、親切な介護をいただき、安心した生活を過ごしていましたが、徐々に衰えて、職員の皆さまに看取られて安らかに御父のもとに逝きました。コロナ禍のために一年以上面会が出来なかった事が私たちにとって、心残りとなりました。

# 説教壇から

エンマヌエル 野口(トラピスト)



今年2021年は昨年来の新型コロナウイルス感染の猛威で年が明け、収束中とは言えコロナで終わろうとしている。感染状況のニュースで埋め尽くされた毎日の連続。修道院の中で生活していると、コロナ感染拡大以前とそれほど生活は変化していない印象が強い。朝晩の散歩に出かける時、かなり歩き始めた後でマスクを持って来ていなかったことに気づき、あわてて家に戻ることも多々ある。以前はテニス選手たちの団体で賑わっているはずの通りは静かな田舎道になってしまい、いくつかのホテルは廃業しているのか、ひっそりとした埃だらけの玄関前は雑草が生い茂っている。やっと非常事態宣言は解除されたが、さて元の通りの生活に戻るのか、これから人の知恵と垣根を超えた互いの協力が問われるのであろう。

新型コロナウイルス感染拡大は経済活動や社会生活に大きな影響を与えてきたが、自分にとってコロナによって強いられた最も大きな犠牲は、毎日の生きる「時間」を十分に生かすことができなかったというもどかしい思いだ。北海道のトラピスト共同体への毎年の里帰り計画は何度か挫折した。典礼委員会の集まりも開かれなかった。社会で生活している方々はもっとこの痛みを身近に感じておられるはずだ。

ところで、この数年の間、高校時代の友人の訃報をいくつか受け取った。教会の中で生きる聖職者と呼ばれるグループの中ではまだまだ自分たちは若い、と自負しているつもりだが、世の中はそうではないようだ。親の介護をし、親を看取りました、という季節の挨拶をいただいたと思っていたら、その友自身の訃報が届き絶句する。確かに、そんな歳になってしまったのだ。所用で白子を出て都内に足を伸ばせば、私はもう「おじさん」から「おじいさん」の部類なのだと、世間の目は容赦なく峻

別する。いやいや、私はまだ若いんだよ、と自分で言い聞かしてみても、頭の毛の薄さや鏡に映る自分の顔は、残酷にも老化していく自分の姿を否応でも見せつける。

そんな一年一年と年を重ねて、コロナのニュースが頭の上を飛び交っている今日も聖書を読みイエスの声に耳を傾ける。何度読み返したことか、同じ福音を今日も読み込む。若き日に語りかけてくださったイエスが、今日も私に語りかけてくださる。同じイエス。でも今日、語りかけるイエスの声は若き日に気づかなかったイエスの心の深い思いを、言葉を通してではなく、イエスご自身の姿を通して伝えているように思えてならない。日曜日の御ミサの中での説教では、そのイエスの思いを言葉で編み直して分かち合おうと努めているつもりだ。説教は聖書講解でも聖書研究会でもない。神学辞典や聖書辞典からのコピーや引用を結論とすることでもない。若き日に仰ぎ見たイエスが今日も人生の秋に差し掛かった私に明らかにしてくださるご自身の思いを、自分の言葉で紡ぎ出すというとても個人的な領域から生まれるメッセージである。もし、高齢の司祭が行う説教の優れた点があるとするなら、それは、自分の人生を通して経験した様々な喜びや悲しみ、失敗や成功をイエスに見ていただきながら、その中に隠れている知恵や神の教えを拾いあげてもう一度味わい直すことではないだろうか。

主イエスは若き日にお会いした時と同じ姿で、私たちと福音の中で出会ってくださる。そのみ声を今日も、白子の静けさの中で聴きたいと思う。世の中はどんどん変化し、コロナの後は予想のできない次の世界に移り変わっていくのかも知れない。時間は瞬く間に私たちを置き去りにしてしまう。有限の時間の中で生きる私たちには計り知れない神の経緯の中で、私たちに今日も語りかける主イエスのみ言葉を分かち合っていきたいと願ってやまない。







## 2021年における主な事柄

---

毎月ルイス<sup>まぜきな</sup>真境名神父さまが告解のために来てくださいました。  
藤岡氏による音楽レッスンがありましたがコロナのために数か月お休み。

- \* 12月20日～1月30日 ジュリアーノ修道士の滞在と聖書講義
- \* 2月16日 Sr. 樋口碩子帰天
- \* 3月8日～9日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- \* 4月10日～11日 献身者平野敬子さん滞在
- \* 5月24日 豊作祈願
- \* 6月14日～15日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- \* 8月2日～11日 聖心会 Sr 長谷川と Sr 吹田による共同体の年の  
黙想会
- \* 8月8日～9月7日 ジュリアーノ修道士の滞在と聖書講義
- \* 8月15日 花火大会
- \* 10月24日 町主催の津波避難訓練に参加
- \* 11月8日～9日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- \* 11月11日 消防署指導による火災避難訓練



十字架のイエス・ベネディクト修道会  
平和の元后修道院

所在地 〒299-4213  
千葉県長生郡白子町八斗 1805

電話 0475-33-3829

FAX 0475-33-7067

HP <http://www.benedictinesjc.jp>

